
暗殺者

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗殺者

【ZPDF】

Z3690D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

次々と国家の中核を担う要人達が殺されていく国があつた。事件の解決に名乗り出た王子はその事件を解決できるのか。そして暗殺の武器は何か。中世のイングランドをイメージして書きました。

第一章

暗殺者

近頃この国では暗殺が頻発していた。犠牲者はいずれも国の中核を担う優れた者ばかりである。

「今度はローズ卿がか

「はい」

国王であるバッキンガム王にまたしても悲報が届けられる。彼は王の間においてそれを聞いて思わず顔を顰めさせた。そのうえで言葉を発するのであった。

「また同じなのだな

「同じです」

報告に来た首相のノート公爵が述べる。実は彼の前任者もまた暗殺されているのだ。

「顔が真っ黒になつて事切れであります」

「苦悶の顔を浮かべてだな」

「その通りでござります」

公爵はそう王に告げる。そこまで聞いた王の顔がまた険しくなつたのであつた。

「これで何人目か

「十人目かと」

公爵はまた答える。

「今月に入つて

「先月では七人だつたな

「そうです」

思えばかなりの数である。しかもその全てが同じ死に方である。これで何もないと思う程王も公爵も愚かではなかつた。

「全て。怪死か

「記録では流行り病にしておりますが

「記録は記録だ」

王は言い捨てた。実際のところ記録は記録であり眞実ではないのだ。公では病死になつていても実際は違うところなど歴史においてはざらである。今もまさにそれであった。

「あくまで記録でしかない」

王はその口髭を奮わせた。そこには強い憂いが見られる。彼は今こうして国を支える者達が次々と消えていくことに不安と危惧を感じていたのである。

「それ以外の何者でもない」

「左様です。然るに」

「何だ?」

「宮中では噂が立ちこめております」

「それについては私も知っている」

王はすぐに公爵に言葉を返した。

「魔術で殺しているのではないか。 そうだな」

「そうです。噂は急激に広まり」

「噂とはそうしたものだ」

王は忌々しげに言い捨てた。

「簡単に広まる。人の口に鍵はかけられないからな」

「はい。ですがこのままでは」

「首相が言いたいことはわかつてゐる」

王は首相に顔を向けて述べた。

「このままでは。恐慌状態になるといつのだな」

「そうです。早急に何とかしなければ」

彼は王に對して述べる。

「取り返しのつかないことになります」

「そうだ。しかし

「ここで王はまた言った。

「どうして死んだのかわからぬ」

「それです」

そこであった。何故彼等が死んだのか原因が一切わからないのだ。だからこそ尊にもなるし彼等も対処のしようがなかつたのである。

「同じ死に方ですが。それがどうしてなのかは」

「犯人として怪しい者はいるか」

王は次にこう問うた。

「誰か。どうなのだ、そこは」

「それもわかりません」

公爵は残念そうに述べた。

「しかしです。思うのは」

「全て私の信頼する者達だ」

王は言った。彼等は全て優秀な者達であり王が仕事を任せている者達なのだ。そうした意味でこの公爵もまた同じである。

「皆今の問題で私に賛成してくれていたな」

「そうですね」

公爵は王の今の言葉にはつとめた。

「そういえば」

「今の聖職者への課税問題に」

実は今この国は聖職者への課税問題で揉めているのである。財政難の解決と聖職者の特権と腐敗の解消が目的であるが当然ながら聖職者達がこれに頑強に反対しているのである。彼等とて自分達の特権を失うつもりはさらさらないのであるからだ。だからこそ問題になつてているのだ。

「全て賛成する方々ばかりです」

「そして反対派は一人も死んではおらぬ

王は述べた。

「だとすればだ」

「何だ、簡単ではありますんか」

ここで誰かの声が聞こえた。そして一人の黒い髪に目をした浅黒い肌の若者が入つて来た。黒い髪は長く伸ばし髪は剃つてゐる。細身で鋭利な顔立ちの美男でありその吊り上がつた切れ長の目が特

に田立つ。服装は黒づくめであり黒い上着にズボン、靴、マントといつ格好だ。実際に田立つ若者であった。

「それでは答えは一つしかあつませぬ」

「何用だ」

王は彼の姿を認めて言葉を少し躊躇した。

「呼んだ覚えはないぞ」

「おや、そうでしたか」

だがこの黒づくめの若者は彼にさう叫ばれても平気な様子であつた。

「そろそろ私の出番だと思い参上しましたが」「出番だと」「左様です」
何か自信に満ちた笑みを浮かべて王に述べるのだった。
「一連の怪死についてお話をされていますね」「そうだが」「王は彼に顔を顰めさせたまま述べた。
「気付いていたのか」「また一人亡くなりましたね」
彼は王の問いかにまずは答えずに自分から問つてきた。
「ローズ卿が」「その通りだ。惜しい人物を失くした」「失くしたのではないでしょ」「しかし彼はそれをこう訂正するのであった。何か思わせぶりな笑みと共に。」「この場合は」「では何だとこうのだ？」「その前に先の父上の問いかにお答えしましょう」「王を父と呼びながら答える。「わしの問いかにか」「はい、気付いていました」「こうでようやくこう答えてみせた。」「こうまで事件が続くと。それも当然です」「そうか。それで太子はどう考えるか」「王はここで彼を太子と呼んだ。彼の名はリチャードといいこの国の太子である。王の長男であり常に黒い服で身体を覆っている。その服装と冷徹で冷笑を好む性格と鋭利な頭脳から黒太子と呼ばれて

いる。

「暗殺ですね」

彼は真剣な顔を作つてそう王に述べた。

「暗殺か」

「はい、黒幕もおおよそわかつております」

彼はそう父王に告げた。

「黒幕もか」

「これはあくまで憶測ですが」

そう前置きしたうえでの言葉であった。

「これまでその暗殺された者達は皆父上の股肱の臣ばかり」

「その通りだ」

それを聞いた王の顔が忌々しげに歪む。だからこそ彼も困つていいのだ。自らの信頼する腹心達が次々と消えていくのだから。しかも聖職者への課税問題に賛成しております

「そうだ。それはわかっているのだな」

「左様です。それならばこの場合黒幕として考えられるのは

「あちら側しかおらぬな」

王は暗い顔で述べた。

「一つしか

「そういうことです。そしてその中でも

「一人しかおらぬな

「そうですね」

王と公爵の顔に同じ暗さが宿つた。彼等の脳裏にある男の顔が浮かんだのである。

「ルネンツ枢機卿か

「そう、あの御仁です」

太子もまた彼の名前に對して頷いた。ルネンツ枢機卿とはバチカンがこの国に遣わした枢機卿である。枢機卿と言えば聞こえはいいが謀略と奸智を好む人物でありそれにより今の地位に登りつけた男である。荒淫で贅沢を好みそれを手に入れる為にも多くの者を陥れ

てきている。残念なことにこの時のバチカンに多いタイプの男であった。これが聖職者の実態でもあったのだ。

「あの御仁ならば」

「充分過ぎる程考えられるな」

王は太子の言葉にあらためて頷いた。

「では。毒殺か」

「そう考えられます」

太子は王に対して答えた。

「いずれも身体がドス黒くなり事切れておりますので」

「そうだな。そういえばあの枢機卿の周りでは」

「こうした不審な死が実に多いのもまた事実です」

太子はそこを指摘する。

「それも昔から」

「そういえばそうだ。しかし」

「ここで王は言つ。

「問題はそれが何の毒かだ」

「何ですか」

「まず考えられるのは料理や酒に毒を入れることだが」
王はそこを指摘した。これはよくある話だ。実際にこの時代においてはそうした暗殺は実にポピュラーなものであった。とりわけイタリアにおいてはそうである。何しろイタリアはその謀略渦巻くバチカンがあり群雄割拠であつたからだ。毒で死んだ者は枚挙に暇がない。

「それはどうか」

「調べてみる必要があると思います」

太子は述べた。

「それで父上」

「うむ」

「今回の事件の解決、私にお任せ頂けるでしょうか」
「やつてくれるのだな」

「はい」

その低く鋭い声で答えた。その声はあるで剣であった。

「是非共。それでは」
「わかった。では頼むぞ」

「はつ」

太子は一礼して王に応えた。彼はまず僅かな部下を連れてローズ卿の自宅を訪れた。まだ葬儀も埋葬も終わつておらず家の者達が呆然としていた。その中にあえて入つたのである。

「これは殿下」

「よつこそここに」

「見舞いに来たのだが」

太子は恭しく自分を出迎えるローズ家の者達にそう言葉を返した。ローズ卿の屋敷は中世の城であり太子から見れば随分古風なものであつた。

「どうなつたのだ」

「奥の部屋に移しています」

卿の妻が答えた。見れば涙の為に目が真つ赤になつてゐる。プロンドの美しい女性だがそのせいでの美貌が台無しになつてゐる。

「そうか。奥の部屋か」

「そうでござります」

そう彼に答えた。

「宜しければそちらに」

「わかつた。だがその前に」

「その前に」

「卿の食事を見たいのだが」

「お食事ですか」

夫人はそれを聞いて怪訝な顔になつた。

「まだどうして」

「卿は美食家だつたと聞く」

この時は笑みを作つた。これもあえて、であるが。

「一体どうしたものをして食べているのか気になつてな。台所はいいか」

「ええ」

太子の言葉があるので断りよつもなかつたがそもそも断るつもりはなかつた。夫人はむべもなく彼の言葉に對して頷くのであつた。

「宜しければ」

「わかつた。それでは」

その言葉を受けて台所に入る。台所に向かつ時に彼は己の手に指輪を嵌めた。それは一見ごく普通の指輪であるがよく見れば普通にある宝石ではなかつた。何か思わせぶりな輝きを持つ宝石であつた。

その宝石を嵌めて台所に入る。細かいところまで調べたが特に何もない。調べながらその指輪の宝石を見ていた。

調べ終わり台所を出た。彼は一つの結論を得た。

「料理ではないな」

そうして次に酒蔵に向かう。しかしそこでも同じであった。

「如何でしたか、我が家の素材等は」

「実にいいものが揃っている」

酒蔵の外で出迎えてくれた夫人に対して答える。これは実際に見たうえでの言葉である。

「酒までな。絶品揃いだ」

「主人は何しろ味に五月蠅くて」

彼女は今日事切れたばかりの夫を懐かしむ声で太子に説明するのであつた。その声が実に痛々しく悲しいものであった。

「それで」

「そうだつたか。では次は」

彼はその話を聞きながらさらに言うのだった。

「ローズ卿のところに行きたいのだが」

「こちらです」

案内されたのは奥の部屋であった。部屋の中は意外と質素だ。單なる風景画と窓がありそこにはカーテンもない。床にも絨毯といつた豪華なものはなかつた。あくまで質素な部屋だつた。目立つのはベッドだがそれすらも天幕のものではない簡素なものであつた。

「ここか」

「驚かれましたか？」

夫人はこう太子に言つてきた。

「この部屋に」

「質素だな」

驚くとは述べずこう述べるのだった。

「食道楽だが。それだけか」

「はい、主人は口は肥えていましたがそれ以外の贅沢には興味があ

りませんでした」 1-6

「それもよくある話だな」

「そうなのですか」

「贅を極めるかそれとも一つのものに凝るか

彼は言った。

「人はどちらかだ。ローズ卿は凝る者だつたのだな」

「そうなのでしょう。他の遊びもしませんでしたし」

「それはそれでいいことだ。少なくとも食は他人に危害は及ぼさない

い

「はい」

「精々己の身体を壊すだけだ。少なくとも」

そうして言う。

「ローズ卿は他人を害してまで何かをする者ではなかつた。その彼がな

「これも。運命でしようか」

「そうかも知れない」

いささか冷徹な声で夫人に言うのだった。

「人が死ぬも生きるも。人が決められるものではない」

「神が決められるのですか

「それとも悪魔が」

実は彼はあまり神というものを信じてはいない。はつきり言えば無神論者であった。だからこそ宗教にもかなり冷淡なのだ。実を言えば聖職者への課税も彼の提案である。そうした特権も好みないが何よりも神を楯にして私腹を肥やす彼等が気に食わないのである。もつとも第一の理由はやはり財政難の解決であるが。それにしても原因是教会の民衆への搾取というのだから実に性質の悪い話であった。

「それはわからないがな。それで

「ええ」

ここで話が動いた。

「ローズ卿は」

「あそこで」

夫人が手で指し示したのはその天幕もないベッドであった。見れば彼はそこに横たわっていた。

「ふむ」

太子は彼を見るとゆっくりと歩み寄った。そうして顔を見る。見れば確かに真っ黒になつていて事切れている。その黒さはさながら黒死病のようであった。

「死因は確か流行り病になつていたか」

「そうです」

夫人も真相は知つていたが。それは決して公にされないものであった。

「そういうことにしました」

「わかった。しかし」

ここで彼はさらに屍を見る。見れば見る程恐ろしい有様であった。肌が黒くなっているだけでなく苦悶の跡がはつきりと見られる。目は大きく見開かれ歯を食いしばった形跡がはつきりしている。手は身体中を搔き築りその血の跡でベッドまで紅く染まっている。それを見れば彼が苦しみ抜いて死んだのがわかる。

「酷い有様だ」

「何故ここまでなつたのか」

夫人は顔を落としてそう述べた。

「やはりこれは」

「それを今から調べる」

太子はその夫人にこう述べた。そうしてまずはその屍をさらに見た。見れば屍は傷だらけだ。しかしその傷には別に暗殺を思わせるような刃の跡はなかつた。だが太子はその屍の首筋にあるものを見

つけたのだった。

「これは」

一つの穴だった。そこからも血が流れているがそれは僅かなものであった。

「ふむ」

「何かおわかりですか」

「いや」

夫人に対しては隠すことにした。ここには芝居をする。

「残念だが」

「そうですか」

「しかしこれだけは言つておく」

身体を起こし屍にシーツをかけてから夫人に顔を向けて声をかける。

「他言は無用だ。そして」

「そして？」

「事件は必ず解決する」

強い声で述べるのだった。

「ローズ卿の無念は必ず晴らす。わかつたな」

「わかりました」

夫人としては相手が太子なので頷くしかなかつた。しかしだだ頷いたのではない。太子の言葉を信頼してもいた。何故なら彼女も太子を知っているからだ。その能力を。

「それでは。御願いします」

「見舞いは終わった」

太子は夫人からの言葉を受けた後でそう述べた。

「ではな。邪魔をした」

「これで。帰られるのですか」

「見舞いに来ただけだ」

そういうことになつていて。彼はそう言つだけだった。

「だからだ。それではな」

「わかりました。それでは、こうして彼は宮殿に帰った。そうしてすぐに父王と公爵のところに行きことの次第を報告した。そうして、一人一人に対してもう一つの事件が発生した。

「事件は解決しました」

不敵な笑みで一人に述べた。

「何を言うのか」

王はそれを聞いてまずは顔を顰めさせた。

「あまりわかつてもいないではないか」

「いえ、もうこれで充分でござります」

太子はその不敵な笑みで王に言葉を返すのだった。

「これで」

「考えがあるのか」

「その通りです。まずは

彼はさらにもう一つ。

「噂を流します」

「噂を！？」

「はい、私が枢機卿を除こうとしている」と
あくまで犯人を枢機卿と考えていた。これはもう確信していた。
だからこそあえて彼を除こうとしているという噂を立てるにした
のである。

「その噂を流します」

「ですがそれでは」

それを聞いた公爵が怪訝な顔で彼に問う。

「殿下の御身に危険が」

「何、それが狙いだ」

しかし彼はその不敵な笑みで答えるだけであった。

「そうして刺客が来たところを」

「捕らえるというのだな」

「そうです」

はつきりと父王に述べてみせた。

「それで万事は解決します」

「そうであればいいのですが」

「既に何もかもわかつています」

太子の中ではそうであった。あくまで彼の中だけで。他の者がそれを知る由はない。それこそが彼の思つ壺もある。

「後は。話の幕を引くだけです」

「わかつた。ではやつてみよ」

王はここは彼に全てを任せることにしたのだった。

「思うようにな」

「はい、それでは」

こうして彼はこの事件の解決も全て任せられることになった。まず彼は自身の腹心の者を集めてこう指示を出したのだ。すで彼等が枢機卿やそれに近い者達とは何の関わりもないことはわかつっていた。

「噂を流せ」

「噂をですか」

「そうだ」

そう彼等に対して告げた。場所はこつした話に相応しい密室の中であつた。

「私が枢機卿を暗殺しようとしている。」
「ですがそれは」

早速一人が異議を呈してきた。

「あまりにも危険では」

「そうです。ただでさえ一連の事件は数奇慶賀黒幕と言われています」

「す」

別の者もこう言つてきた。

「それでそうした噂を流せば」

「自然と枢機卿が」

「だからだ」

しかし彼は腹心達の気遣いの言葉に対してもう返すのだった。余

裕に満ちた笑みと共に。

「だから流すのだ」

「むざむざ狼を呼び込むのですか」

「やはり危険です」

「この国では狼が最も恐れられている。だからこそ今狼といつ言葉が出たのである。

「危険はわかっている」

しかし彼は平然とこう返すだけだった。

「当然な」

「ならば余計に」

「危険過ぎます」

「私が何の考えもなしにするとでも？」

「ここでであった。彼は言つた。

「思うのか？」

「いえ、それは」

「ありませんが」

それは彼等も思つてはいなかつた。太子の鋭利さは彼等もわかつてゐる。そうしたところに湧き起つてゐる魅力によつて彼等も彼の腹心になつてゐるからだ。それについては彼等は否定出来なかつた。

「それでは。いいな」

「はい」

「殿下に何か御考えがあれば」

「ではまずはだ」

「ここまで話したうえで彼等に言つのであつた。

「備えをはじめる」

「備えをですか」

「そうだ。まずは氷室から氷を出せ」

この時氷は冬の間に自然に出来た氷や雪を入れておくものであつた。氷室は大抵地下の寒い場所に置かれている。そこに保存してい

るのである。

「氷をですか

「そう、そして」

「彼はせりて言つ。

「皮を用意しておいてくれ

「皮ですか

「そうだ、しかもかなり厚い皮をだ」

「いつも注文をつける。

「いいな、厚い皮をだ」

「一体何に」

「氷と皮とは

「その時になればわかる」

彼はここでは全てを述べなかつた。あえて隠してそのままのひで含み

笑いを浮かべるだけであつた。

「その時にな

「そうですか

「それでは

彼等も今はそれで納得することにした。いつも準備は整えられ

ていつたのであった。

それから数日後。太子はいつものように自身の部屋で寝ていた。その警護は厳重なものであり窓は全て一重に閉められ扉の前には兵士達が詰めている。とても暗殺なぞできるとは思えない。当然食事にも気を配り食材を自分で選んで自分で作る程であった。そうして身の回りを慎重に固めていたが今その部屋に何者が忍び込んだのである。

その何者かはゆっくりと彼に近付いていく。そして、彼の身に何かが起こったのであった。

翌朝。彼に仕える従者が起こしに来た。するとすぐに返事が返つて来た。

「話は終わつたぞ」

「終わつた?」

「そうだ」

最初は何事かと思ったがそれは間違いなく太子のものであった。彼等もそれはわかりとりあえずは安心した。しかしそれだけではなかつたのだった。

「すぐに来てくれ」

彼はこう従者達に叫ぶのだった。

「すぐにな。いいな」

「部屋の中ですね」

「そうだ」

「いいな」

「はい」

「それでは」

そう言葉が来た。部屋に入るようのことだった。

彼等はその言葉に従い部屋の中に入った。絹のカーテンや紅い絨毯で飾られた豪奢な部屋である。その部屋の中に太子はいた。見れ

ば既に普段の服装であつた。

「服でしたら」

「私共が」

「何、用心の為だ」

鋭利な笑顔で笑つて彼等に述べる。彼はベッドに座つて彼等に顔を向けていた。

「これもな

「そうでしたか」

「確信はあつたがそれだからこそだ」

「いつも言つのだつた。

「一応はな

「一応は、ですか」

「すぐに動けるにこしたことはない」

流石であった。そうしたところまで丹念に気を配つていたのだ。その為普段の服で寝ていたといつのだ。彼等は太子の言葉を受けて大きく頷いた。それと共にあむことにして氣付いたのであつた。

「それにしてもこの部屋は

「やけに

「寒いか

鋭利な笑みを向けたまま彼等に問うたのだった。

「部屋の中が」

「ええ、これは一体

「どうこうことですか?」

「これだ」

彼はここで部屋の片隅を指差した。そこには氷があつた。

「氷ですか

「まさか氷室の」

「そうだ、その氷だ」

彼等に告げる。先に氷室から出すよつに命じたあの氷があつた。

「それを出してここに置いておいたのだ。塩をかけてな

「塩ですか」

「氷に塩をかければ余計に寒くなる」

彼は従者達に述べる。

「それで部屋をことさら寒くさせていたのだ」

「そうだったのですか」

「その通りだ」

また答えてみせた。

「それは成功したな」

「成功！？」

「何に」

「見ろ」

「ここ」で部屋の床の真ん中を指し示した。するとそこにいたのは、蛇であった。血の様に赤い色の蛇であった。

「蛇ですか」

「そうだ」

太子は言つ。

「わかるな」

「それはわかりますが」

従者達は彼の言葉に答える。しかしここには疑惑もあった。

「しかし」

「どうして蛇がそこに」

「寝ているのか聞きたいのだな」

太子はその言葉を受けて従者達に問い合わせた。見れば彼等はいかにもそうした顔を見せていた。

「そうです」

「どうしてでしょうか」

「考へてもみよ」

「ここで彼は言つのであった。

「考へる、ですか」

「そうだ。蛇は何時出るか

彼はまた問ひ。

「夏か、それとも冬か」

「夏です」

その答えは決まつていた。それ以外にはなかつた。

「冬には出ません」

「何故ならそれは」

「寒さに弱いからだな」

「その通りです」

「それでは」

ここで彼等はようやく氣付くのであつた。太子にとつては遅まきながらであるが。

「その氷だ」

「その通りだ」

太子は彼等のその問い合わせに不敵に笑つて答えるのであつた。その笑みには絶対の自信さえ浮かんでいた。

「わかるな。それに塩もかけた」

「塩もですか」

「そうすれば余計に寒くなる」

彼はこうも述べた。

「だからこそさ」

「それではやはつ」

「寒さは」

「そうだ、蛇に対してだ」

ようやくといった感じであつた。手の内を全て見せたのであつた。

「これはな」

「左様でしたか」

「だからこそ塩まで」

「その寒さで蛇を眠らせた」

蛇を見ながらの言葉であつた。冷徹でありながらも実に學問的な、
そうした響きの言葉であった。

「これでわかつたな」
「はい」
「そういうことでしたら」
「それに。その寒さの方が『あらもやり易い』」
「ここまで語つたうえでこう迷づぐのであつた。
「やり易い？」
「それは一体」
「この服だ」
　今度は己の服装を指し示した。見ればかなりの厚着で戦場に出る程のものではないがそれでもこの季節に着るものでは到底なかつた。
「その方がこの服で過ごし易いものだ」
「その服は何の為でしうか」
　従者の一人が今度はそれに問つた。
「宜しければ御答え願えませんか」
「これが」
　太子はその問い合わせにまた受けて答えるのであつた。
「これも蛇への備えだ」
「蛇ですか」
「蛇の武器は何か」
　そうしてまた問うのであつた。
「一つあるな。それは何だ」
「一つは牙です」
「これは言つまでもない。蛇が何故恐れられてゐるのか、まずはこれであつた。そうして蛇の恐怖といつものはそれと必ずセットになつてゐるのであつた。」
「そしてもう一つ」
「それは」

「毒だな」

太子の方からもう一つの答えを言つてきただけであった。

「そうだな」

「はい」

「その通りです」

これは従者もわかつていて、だからこそすぐに答えたのだった。

「それではその二つを防ぐ為に」

「その厚着は」

「これもな」

太子は首も見せる。そこには首全体を覆う厚いカラーがあった。

「これもある」

「成程」

「そうして御自身を守つておられたのですか」

「わかつたな。用心には用心が必要だ」

あらためて彼等に対してもう一つの答へた。

「こうして私は刺客を退けた」

「この刺客を」

「この蛇を」

従者達もまた蛇を見下ろしていた。蛇は何も語らずにそこに横たわっている。死んではない。ただそこに眠つてゐるだけであった。太子はその蛇を見下ろして言つのであった。

「この蛇が誰に手によるものかわかるな」

「無論です」

「やはりこれは」

「そうだ、枢機卿の手によるものだ」

それはもうわかつていて、それしか有り得ない答へた。

「さて、どうするべきか」

全てを踏まえて太子はまた言つた。

「これまで枢機卿は私も本氣で消すつもりだとわかつたわけだが

「容赦することはありません」

彼に忠実な従者達はすぐに彼に述べるのであった。

「「」は復讐を」

「誅殺を」

それぞれの口で囁く。だがそれに對して太子は首を静かに横に振るのであった。

「それはできぬ

「どうしてですか」

「「」の蛇は

「では聞こう」

太子はまた己の従者達に對して囁くのであった。

「証拠はあるのか」

彼が問うのはそこであった。

「「」の蛇が枢機卿のものであると。その証拠はあるのか

「証拠ですか」

「そうだ」

また彼らに對して囁く。

「あるのか。どうだ」

「それはその

「つまり

「ないな」

曖昧な返事をする彼等を「」で統括するのであった。

「そうだ、それに異論はないな」

「残念ですが

「結局のところは

そうなのであった。証拠と言われても結局のところは何もないの

だ。この蛇にしろ誰のものなのか傍目にはわかりはしない。だからこそ彼はこの蛇で証拠を出すことはできないと言っているのである。

「枢機卿をこのことで追い詰めるのは不可能だ。向こうつも知らぬ存
ぜぬで通す」
「そうですね」
「あの枢機卿なら」
「しかし。消すことはどうできる」
だが彼はそのつえでこうついつのだった。平然とした、それでいて
酷薄なものある顔で。
「彼をな」
「できますか」
「それではまさか」
「そうだ、自分の手駒で死んでもいい」
その酷薄な顔で蛇を見下ろす。そしていつのものである。
「どうだ、それで」
「それではこの蛇は」
「死んではいない」
また蛇を見て述べる。
「眠つているだけだ。いつならば冬眠だ」
「冬眠！？」
「蛇は寒い中では冬眠する」
そのことを従者に対しても説明してみせた。
「それもあつて寒くさせたのだ」
「部屋の中をですか」
「そうだ。これを枢機卿の部屋に忍び込ませろ」
彼はそう指示を出した。
「よいな、それで」
「はい」

従者達は今の太子の言葉に頷いた。むべもなくといった様子で。

「わかりました」

「それではすぐに」

「頼むぞ。上手くいけば」これで話は終わる」

「いつも言つた。

「これでな」

そのうえでその酷薄な笑みをさらに深いものにさせるのであった。彼の打つ手はもう行われていた。そうしてそれから数日後。枢機卿が急死したとの話が伝わつたのであった。

「死んだな」

「そうですね」

太子はそれを父王から直接聞いていた。一人は公爵も交えて王の間で三人で話をしていた。その時の話なのであった。

「身体がドス黒くなつて死んでいたそうだ」

「おやおや、それは」

太子はそれを聞いてわざとおどけてみせた。

「同じではないですか、今までの死に方と」

「そうだ、同じだ」

王もそれはわかっている。わかつてゐるからこそそれを強調するのであつた。

「死んだ。同じようにベッドの中で」

「ふむ」

「やはり死因はわかりはしない。一応は病死と云ふことになつてゐる」

「病死ですか」

それを聞いた時の太子の顔がシニカルな笑みに包まれた。それは真相を知つてゐる者の笑みに他ならない。その笑みを今ここで見せているのである。

「それはまた」

「不思議な話だな」

王はあえて太子のそれに乗り。いつも言つのだつた。

「ここまで急死が続くとは」「流行り病でしょう」

太子の言葉はあくまでしがつとしたものであった。少なくとも記録のうえではこうなるものだ。実際のところこうして急死した話は多い。真相は普通に記録や歴史を見ただけではわからないものなのだ。

「ただの。しかし」

「それもこれで終わりだな」

「はい。病は過ぎました」

またクールに述べた。

「程なく」

「そして聖職者への課税は」

「何の問題もなくなりました」

太子はそれが本題であると言わんばかりに言つてみせた。やはりここでもシニカルな笑みである。

「よいことです」

「それでは陛下、殿下」

公爵が一人に声をかけてきた。穏やかだが笑みを含んだ声で。

「今からそれについてお話ししますか」

「そうだな。では太子よ」

「はい」

父王の言葉に顔を向ける。

「それに関してそなたの意見を聞きたい」

「わかりました、それでは」

「そなたにもだ」

太子に声をかけた後で宰相である公爵にも声をかけるのであった。

「それでよいな」

「畏りました」

「反対する者達に対しては病は起ることはない」「王はまた病を出したがそれはここだけであった。

「ただ牢に入れよ。わかつたな」

「わかりました。まあその心配も少ないのでしょうが」

太子にはわかつていた。反対派の巨魁である枢機卿がなくなつたからだ。だからその心配は消え去り彼等は安心して政策を遂行することができるのであった。

「それではそのように」

「うむ。そして」

政治の話は進む。なお一連の急死については記録では病死とあるだけであった。真相については当時から色々と言われているが結局は藪の中である。全ては歴史の謎ということで終わっていた。ここに書いた真相を知る者は当事者だけであるが今ここにあらたにわかつたこととして書き留めておきたい。この時の聖職者課税問題で何があつたのかを。

暗殺者 完

2007・11・12

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3690d/>

暗殺者

2010年10月8日15時04分発行